



### 無くした子供の年令を数えても……

歯科の大学が30校ちかくもある現在、すこしも珍らしいことでもないけれど、人口3万少々に減少してしまったゴーストタウン美唄に、本年中に新規開業の歯科医院が3軒予定されている。予定地には随分と前から看板が立っているので「歯医者さんは儲かるんですね。現在でも結構な数があるのに、更に3軒も増えるんですから」などと、美唄雀は無責任にかしましい。昭和初期に「大学は出たけれど」のタイトルの映画があったけれど、現在の歯科事情こそまさにそのものといえるのでは。大学を卒業して何年か修業して一人前になっても適当な就職口がないに等しい。それ故に止むを得ず開業するようである。かくいう小生が、40年程前に開業した頃の歯科事情と現在とは、余りにも違いすぎるとしかいえない。隔世の感という言葉は、このような時に使うことが最も相応しい言葉でもあろうか。サバイバルレースそのものの現在の歯科事情に比べれば、朝から晩までただ立ち通して、案山子そのままの毎日を送っていたあの頃、そして3年に1度位は定期便のように必ず来る招かざる客、にくりしい税務署の調査さえも、今となっては、ほろにがさまで懐かしい思い出のひとつまではある。無くした子の年令をかぞえても、せんないことではあるが、古き良き時代であったのかも知れない。これこそ年令を取った証拠かもしれない。

(雨田 実記)